

教養デザイン研究論集

第15号 2019. 2

橘樸思想の形成

——大正生命思想と療養経験について——

The formation of Tachibana Shiraki's thought

——Concerning the Leben and his experience of treatment——

博士後期課程 教養デザイン専攻 2015年度入学

趙 東 旭

ZHAO Dongxu

【論文要旨】

橘樸（たちばな しらき、1881-1945）は日本のジャーナリスト、中国研究者である。1881年に大分県に生まれ、1906年に中国に渡り、中国の政治、経済、社会、民衆などを考察、研究し、凡そ四十年間の人生をそこで送った。戦後の橘樸研究は、様々な角度から展開されているが、その思想史における位置がまだ定まっていないと言える。ある思想家を研究するためには、その時代背景を把握しなければならない。本稿は明治末から大正に至る時代背景を参照しながら、橘樸の青少年期の思想動向、1918年の療養経験及び1923年の文章「人生観成立の過程」を手がかりとして、橘樸思想の形成及びその性格を解明しようとした。

【キーワード】 大正思想、レーベン、未完成の時代、女性運動、人生観

はじめに

橘樸（たちばな しらき、1881-1945）は、ジャーナリスト、中国研究者である。1881年に大分県に生まれた。その青少年期において、酒にからんだトラブルが多く、またしばしば学校の制度に違反したため、転校を繰り返していた。1905年に北海タイムス社に入社、ジャーナリストとしての生涯を開始し、翌1906年に中国に渡り、大連の遼東新報社に勤めた。ところが1918年のシベリア出兵の時に、青島守備軍嘱託、従軍記者としてチタに赴き、チタからの帰途、ウォッカの飲み過ぎで脳溢血で倒れ、9月からおよそ三カ月間の療養生活を送ることになった。1924年から、橘は中国

国民革命を観察、分析し、大量の論説を発表した。そして1931年の「満洲事変」をきっかけとして、橋は関東軍協力者、満洲国イデオログに転向し、満洲国の現状に基き、農民民主主義、職業自治のスローガンを掲げ、東亜改造論など壮大な計画を構想するところとなった。しかし、満洲国はむしろ橋の期待から逆行していき、1945年日本敗戦とともに滅亡したのである。橋自身も10月15日に、肝硬変のため奉天で亡くなった。

ここまで、橋樸の生涯を簡単に紹介したが、現在に至っても、橋樸の名前は人にあまり知られていない。戦後の橋に関する研究は、各々の角度から進んでいったにもかかわらず、まだ十分に展開されているとは言えない。なぜかという、ある思想家を研究する場合、その時代背景と思想の基本的な展開の仕方を究明しないまま、その人物を把握、ないし思想史において彼を定位することが不可能であるからであろう。それゆえ本稿は、橋の思想の基礎たる大正生命思想及び彼に多大な影響を与えた療養経験を手がかりとして、これまでの橋研究において欠落した部分を補足し、橋思想の形成の経緯を究明しようとするものである。

一、大正期の思想の展開：個体の内面的確立、生命思想の分化と「未完成」の時代

1. 明治から大正へ：個人と自我の確立

大正はどんな時代なのか。船山信一は彼の『大正哲学史研究』において、明治または昭和の哲学と比較しながら、大正の哲学を次のように定義している。

明治哲学は、概括的にいえば、または少なくともその主流についていえば、政治・国家と密着し、政治・国家に従属していた。昭和哲学においても政治・社会との関係が大きな問題であった。ところが大正哲学は、少なくともその主流であるアカデミー哲学は、政治・社会から「超越」していた。……明治は国家の時代、昭和は社会の時代であるとすれば、大正は個人・自我の時代である¹。

さらに彼は、明治哲学が「観念論は直ちに現実主義であったのである」のに対し、「大正哲学においては主観は独自の内容をもち客観的なもの実在的なものに還元されない。現実主義に対立する理想主義もここにはじめて成立する²」と述べている。つまり個人の自我の時代であると同時に、内面的個性性、観念論及び理想主義の真の成立がまさに大正時代において為されたのであった。

「観念即実在」、「現象即実在」といった思考法は、明治時代における外部と内部との緊密性あるいは時代の緊迫性を示している。緊迫性について言えば、明治政府の国策の基本たる「富國強兵」のスローガンが示すように、当時の時代の主題は「日本民族対欧米列強」という対立の図式の中にある国家・民族・政治にかかわる主題であった。さらに、飯田泰三の研究によれば、

(1) 1894年の日清戦争、1904年の日露戦争を経て、日本は植民地化の危機を脱しただけではなく、強国の一員として帝国主義列強クラブに加入したのである。それとともに、国家・民族・政治

のような硬い主題が思想界では後退し、その代りに社会・民衆・生命（生存，人生）といった概念が新しい時代の主題として浮び上がった。

(2) 次に、国家体制の強化、資本主義及びその理論の発展、共同体の解体と競争社会の形成、市民社会の公共性と原理がなお確立されなかったことなどの原因で、国家に対する個人の疎外感が一層強まり、個人主義の要素がそこから析出され、社会問題や自我問題に対する関心が、当時の知識人の主要な時代課題になったのである³。

こうして、ナショナルな危機意識の解除とともに、明治末期から大正にかけての知識人たちは、その目線を「レーベン」（生命，生存，生活）という、より根本的、普遍的な領域に向けていったのである。さらに、「レーベン」に向う傾向は二つに分かれ、一つは生活と人生、もう一つは生物と生存などの注目となった。以下ではさらに飯田泰三の研究を踏まえながら、その分化について論説を展開する。

2. 知識人の基本傾向：生命思想の分化

2017年に出版された飯田泰三の著作『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』は、大正生命思想の基本構造を解明するための、一つの新しい視角を提供している。飯田によれば、当時の知識人の基本的な動向は三つある。つまり、「第一に「自我」の“内面的主体化”への志向であり、第二に「社会」の“実証的対象化”への志向であり、第三に自我と共同体の“ロマン的融合・合一化”への志向である⁴」。前の両者は、大正知識人における基本的な分化を示している。飯田の言葉を借りると、前者は「主体の」レーベンであり、後者は「環境に向かったの」レーベンである。明治期においては、両者の関係は相互促進的で、幸福な関係であった。それについて、飯田は次のように説明している。

“明治ナショナリズム”においては、個人主体とその環境との関係は、概して言えばその“乖離”の痛切な自覚を要せず、相互促進性をもって互に他を予定しているような、「幸福な」関係にあったと言える。国家-職業集団-共同体-家という生活空間、環境に向かったの適応と、個人的アチーブメントとが、さらには、普遍的な価値・規範によるその意義付けや方向付けとが、乖離することなく、相互補強しあう関係にあったところに、「明治国家」の飛躍的発展の一つの原動力があった⁵。

簡単に言えば、明治期の人々にとって、「国家のため」即ち「個人のため」、ということであった。国家が自明の価値をもつというだけではなく、個人の価値を実現するためにも、国家という対象が必要であった。しかしこういう関係が明治末期からどんどん崩れていった。前節で提起した(2)を原因として、「国家」に対する「個人」の疎外感が強まっていったため、レーベンに対する姿勢も二つに分かれてしまったのである。このことについて、飯田は次の如く述べている。

したがって、そこに始まるレーベンの意識化も、その「主体の」側面に即してのそれと、「環境に向かったの」側面に即してのそれが、互に他を見失った形で進行することになる。主体と環境との“乖離”の自覚そのものさえ欠いた形で——したがって、主体性と対象性の両側面の実践的統一体としてのレーベン本来の性格さえ見失った形で——、それぞれの意識化の方向が自己運動を始める。すなわち、一方、「主体における」対自化は、「環境に向かう」営みたる面を置き去りにした「内面的」意識化となり、他方、「環境における」対象化は、「主体の」営みたる面を置き去りにした「実証的」認識となる。個体における「内面化」は、実践的「主体性」を見失い、環境認識における「実証化」は、「対象性」——実践的主体意識との緊張関係において成立するところの——を見失うのである⁶。

明治末期から大正にかけての知識人の外部と内部に関する感覚は、明治前期のように、国家と個人あるいは外部と内部が生産的緊張感を持ち、相互促進の関係にあったのではなく、いわば断裂したと言える。彼らは、自我は外部の実践を通さずとも自我の内部で確立し得ると考えるようになったため、外部は彼らにとってただの「対象」になり、実証的に研究し得るものになった。

こうして、国家・民族・政治の主題から離脱した後の大正生命思想は、同じ生命（レーベン）をめぐる二種類に分かれ、さらに知識人の系譜も二つに分化したのである。一部分の知識人は、「人生」、「人格」を主題として、新カント主義、新理想主義の旗を掲げ、「人生の価値はどこにあるか」、「理想の社会はどのような社会なのか」という問題を追求した。たとえば阿部次郎、土田杏村などがそうである。それに対し、他の一部の知識人は、「生物」、「生存」を主題として、外部社会に対する実証的研究を行っていった。彼らは、明治末期の社会主義者や長谷川如是閑によって代表される。この二種類の知識人の基本的な傾向から見ると、前者は物事のある「べき」状態を構想する人々であるのに対し、後者は物事の「ある」状態を研究する人々だと言えるであろう。知識人の分化に加え、政治から文化の領域にかけて「中間層」の台頭、「中間化」の傾向を見れば、大正という時代はやはり過渡的、中間的であり、いわば未完成の時代だったことが分かるのである。

3. 中間的、未完成の時代

竹山護夫（1943-1987）はその著作で、大正の特徴を次の如くまとめた。「この時代を最も時代特徴的な形になった担い手は「中等社会」であり、なかならず新旧の中間層の人々であった⁷」。ここでいういわゆる「中等社会」あるいは「中間層」は、主に小官吏、小会社員、巡査、教員、小地主、小商人、小市民、小農民を指すのである。

まず文化領域に関して、竹山は「芸術と娯楽の間に位置する中間文化が「趣味」という名で普及を企てられ、建築や服装には「和洋折衷」が風俗化した（南博「文明から文化へ」）。後に田辺元の中間者の哲学として集約される哲学者の営みから、総合誌と娯楽雑誌の間隙を目標とした中間誌としての『文芸春秋』の発行とその成功（井ヶ田良治「知識人とプロレタリア文化運動」）に至るまで、文化領域は「中間」を意識した発想で占められた⁸」と説明している。

次に広義の政治的領域について、竹山は次の如く述べている。「新中間層を基盤にして成立した民本主義は大正リベラリズムの政治的表現であり、「大正デモクラシー」の代表的実質であったが、それは、藩閥官僚勢力による国家の指導に対抗して「一般民衆」の意向に基づく「憲政」を主張する一方、社会革命を目標とするボルシェヴィズムに対しては同じく立憲政治を当為とすることによって反対する中間的な「改造」の思想であった⁹」と。

そして狭義の政治上の状況に関して、竹山は岡義武の『転換期の大正』を引用して以下のように説明した。すなわち「大正初頭のいわゆる「大正政変¹⁰」と「シーメンス事件¹¹」は、従来政権をタライ廻しにして来た桂太郎と西園寺公望を刺し違いにし、陸軍の発言力を低下させ、薩派の巨頭山本権兵衛を挂冠させて、海軍の発言力を封じた。……諸政治勢力は均衡し、この中で例外として上昇を続けていった「政権の中心点」を構成した政友会が原敬の死によって後退した後では、この状態を象徴するように「中間内閣の季節」（岡義武『転換期の大正』）が続く¹²」、ということである。

こうして、新旧中間層の台頭、藩閥政治の弱化などを原因として、過去の同一の国家目標に縛られたさまざまな思潮が一斉に噴出したにもかかわらず、再統合されなかったため、大正はその「中間性」及び「未完成性」を主な特徴として歴史に現れてきたと言える。竹山はその意味について、次のように説明している。

政治指導から生活文化に至るまで「中間」という言葉で象徴することができる大正時代は、しかしながら、中間を制度化し、恒常化することはできなかった。時代の特徴的な担い手である都市の新旧中間層と農村の旧中間層は、もともと様々な方向へ分化していく可能性を抱いていたが、これまたこの時代の特徴である好況と不況のあいだで揺り動かされ、それを具体化していった。「民衆」は大衆に、民本主義は社会主義に、中間内閣は政党内閣へと変わった。そして、そのように中間自体が定着することに失敗したからこそ、われわれは後から顧みてそれを中間であり、過渡期と評価し、逆説的ながら大正にとっての「時代の同一性」を見出すのである¹³。

以上で述べたように、大正はまず政治的主題から離脱した個体の内面的な確立の時代、「ある」に関する研究と「べき」に対する構想が生命思想の両面として併存する時代であり、またさまざまな思想が噴出する、中間的で未完成の時代であったと言える。これらの特徴が、1881年に生まれ、日露戦争前後に青年期を送った橘樸の思想の型を铸造したのである。

二、橘樸の思想背景と療養経験

1. 橘樸：時代の子

1881年に生まれ、明治末期から大正初期にかけて青年期を送った橘樸は、当時の時代風潮に深

く影響を受けた。その青少年時代の履歴を見ると、やはり橘は典型的な時代の子であったと考えられる。ここで簡単に橘の青少年時代の経験を参照しながら、彼の思想の推移を分析する。

1895年に日清戦争に勝利した日本は中国から植民地と多額の賠償金を獲得した。これは日本にとって、外部危機の解除の第一歩であると同時に、植民地帝国の始まりでもあったが、前の時代のナショナルなものへの志向の稀薄化も、そこから始まったと言える。

1897年、岡崎の愛知二中の三年生に進級した16歳の橘樸は新任の教諭兼舎監長である K という陽明学者と出会い、彼の豪傑のような性格に魅了され、英雄豪傑になりたいという観念が生まれた。当時の橘において、「英雄豪傑」の対象はインドにあり、具体的にいえば、彼は「印度大統領」になりたかったのである。その理由について、橘はその自伝『手』で「ワシントンが亜米利加で建てた勲業を、私は印度で繰返してやろう¹⁴」と回想している。その時の橘を当惑させた問題は、天皇の問題、つまり「大統領になることはよいが、然し大統領は国の元首であるから、天皇陛下との縁が切れて了ひはしないかと云ふ心配¹⁵」であった。ここから見ると、愛知二中時代の橘の関心は、まさに国家・政治そのものに向かっていたことがわかる。その述懐の中には、国家主義的な思考が読み取れる。その背景を考えてみると、初代文部大臣森有礼は、1885年から国家主義的な教育改革に着手し始め、1889年1月28日に発布した文相説示「学政の目的」で「学政の目的も亦専ら国家の爲と云ふことに帰せざるべからず。例へば、帝国大学に於て教務を掌る學術の爲と国家の爲とにかんすることあらば、国家のことを最先にし、最重んぜざるべからざるが如し。夫れ然り、諸学校を通し、学政上に於ては、生徒其人の爲にするに非ずして、国家の爲にすることを終始記憶せざるべからず¹⁶」と、教育の目的が専ら国家にあることを規定していた。それに続いて、明治国家は、1890年10月30日に発布した「教育ニ関スル勅語」の冒頭において「朕惟フニ我カ皇祖祖宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス¹⁷」と示しており、国家主義の教育趣旨を天皇の権威を借りて定着させたのである。

このような教育環境が少年の橘に深く影響を及ぼしたのは当然であったが、それにもかかわらず、1894-95年の戦争が日本のナショナルな志向の頂点である一方、そこから徐々に下り坂になる側面も出て来たのである。この変化も橘個人において反映されていた。自伝で橘は「印度大統領の空想が全く私の頭から影を潜めたのは十八歳の春頃（1899年、筆者注）であり、人生問題に対する懷疑の始まったのも亦その頃であった¹⁸」と回想している。彼の自己評価としての「第一に豪傑病、第二に反逆癖、第三に懷疑又は批判癖¹⁹」が彼を支配し始めたのも、ちょうどその頃であった。翌年の卒業の直前に、橘はリーダーとして、高山中学校で同盟休校運動を引き起したため、放校になり、東京に行くことを決めるに至った。学校の制度に違反して転校せざるを得なかったところに、青少年期の橘樸の特徴が表れている。それは当然生まれつきの性格によってであるが、1905年に北海タイムスの採用試験のために書いた小説が「徴兵忌避の思想を鼓吹」しているのではないかと問われた時、橘は「嫌なものは嫌だし、忌避は偽はらざる自然の人情に過ぎない²⁰」と答えている。

こういった部分を見ると、彼の中で国家主義的側面が衰弱しつつあることも窺えるのである。橋の制度化あるいは体系化したものに対する反感と、生命の自然及び解放に対する追求などの傾向の原点は、まさに彼の学校での「暴行」に示されているのではないと思われる。

日露戦争前後、日本社会において大量の「煩悶青年」が現れてきた。徳富蘇峰は彼らを「社会を一掃しつつある成功熱に反抗し、若しくは其熱に取り残され、其他種々の理由よりして、一世を不可とし、而して此の不可なる世を、如何に渡る可きかに当惑する、所謂煩悶青年の一群²¹」と描写している。つまり、競争社会で立身出世するか、それとも社会の正義を追求するかという問題が、当時の青年たちの目の前に立ちはだかり、橋もそういう問題に直面せざるを得なかった。戦場で日本軍の優勢が明らかになっていった頃、ある軍事通の意見による、もし日本が勝ったら「少なくとも樺太の割譲、これを足掛りとするニコラエウス及び浦鹽の経営、更に一步を進めて黒龍江畔では哈爾濱から奉天、こうした広大もない新天地が我々の前に開かれる²²」という予測を聞いた橋は興奮して、「好矣と云うので、私は一夜の内に北海道行を決した。札幌は西比利豪傑の中野天門と云う男がその活動の根拠地とし、彼の作った「北海タイムス」と云う言論機関があると云うので私はその記者となった²³」と述べている。ここから見ると、国家の境界を踏みこえた、地域としての樺太、シベリアないし中国東北部のすべてが、橋にとって、個性が縛られる「煩悶」の状態から脱出し、生命力を解放すべき「新天地」であった。国家に対する懐疑、社会に対する「煩悶」など、当時の青年たちの一般的な特徴は、橋樸にも当てはめられる。橋を時代の子と呼びうるゆえんである。

2. 療養経験(1)：個性に対する自覚

前節で橋樸が時代の子だと述べたのであるが、橋の思想家としての独自性は、また元々の彼の個性の強さに由来していたと言える。「個性」は橋の思想の中の最も重要なものであった。しかし彼が「個性」そのものを自覚し始めたのは、療養経験の時であった。この療養経験とは、1918年9月に橋が従軍記者として日本軍とともにシベリアに赴いたとき、チタからの帰途においてウォッカを飲み過ぎて脳溢血で倒れ、その後、マンチュリーの病院でおよそ三か月間の療養生活を送ったことを指す。それは橋にとって、人生の危機であると同時に、彼の思想の形成を促した契機でもあった。

医者にまず七年は大丈夫だろうと言われたものの、右半身不随になった橋は余生を五年と仮定し、これから何をなすべきかについて考えた。その結果一時期、一種の「自己否定」、「享楽主義に近い独善主義」の態度をとったのである。しかし、この態度は順調に進まなかった。当時の心境に関して、橋は次の如く述べている。

健康な時代には厖大複雑にして処女地の如く残された支那社会を対象とした学究生活に私の全生活興味を没頭させていたのであるが、廃残の身となつては斯様な大きなアンビションは綺麗に捨てて了う外ないとあきらめたのである。然し私の享楽主義は如何なる意味に於ても酬い

られたと云われない。これには勿論物質的理由もつき纏ったが、然しそれ以上に精神的理由、換言すれば私自身の個性が私の計画を裏切って、不可抗的に私を昔の学究生活に引もどした。気がついて見ると成程この方が自然であり、形式的には兎に角、実質的には享楽主義の本旨にかなって居たと云うことが出来る。……学究生活なるみすばらしい生活様式を義務又は貢献という意味に解釈すると、その生活は本人にとって一つの重荷となる。然し独善主義と云う新しい立場からこれを眺めると学究生活でも自ら好んでこれを選ぶとすれば、主観的には楽の一種、換言すれば享楽主義的生活の一方便となり得る。この数年来の私の生活態度はかかる人生観の上に立ち、稀に物質的困難の場合を除いては何等の不安、何等の不満足を感じない²⁴。
(下線は筆者による)

この回想は、橘の個性や自然に対する自覚を示している。注意すべきは、彼の場合の自然は、ただ自由放任のみではなく、むしろ一種の「個性」に適合する状態を指している。橘によると、その状態こそ、楽しみであり、真実である。外部の強制や義務を負うことなく、自分の「個性」に適合する方式で生きることが、橘が考えていた理想状態である。青年期の橘はそういうやり方で生きていたが、それはあくまで個人の傾向性に過ぎなかった。「個性」そのものを自覚し、それを人生観ないし世界観のレベルにまで昇華し始めたのは、今回の療養経験からであったと考えられる。

3. 療養経験(2)：生命の内面性と普遍性

橘が療養経験から得たもう一つのものは、生命の感受性あるいは内面性と普遍性に対する発見であった。1918年に病床に伏した橘の面倒を見ていたのは、お喜久という女性であった。彼女との付き合いによって、橘の女性観に革命的な変化が起こった。1923年に、五年間の死期意識が過ぎ去った後、橘はお喜久との付き合いを回想しながら、「垣間見の記」という小説風な文章を書いて『京津日日新聞』に連載していた。

これまでの橘は、女性を人間として扱わない、偏った女性観の持ち主であった。それは恐らく彼自身の偏った性経験によってである。彼が異性に触れ始めたのは、日露戦争後に北海道に記者として勤めていた頃であった。酒の勢いで、同僚の一人とともに札幌の『薄野』という遊郭に遊びに行った、ということである。その後も、恋愛を経ずに同じ事を何回も繰り返したため、橘の女性に対する偏見が築き上げられたのである。女が男と同じように人格をもつものとは考えなかった。またもう一つの原因として、理智に自負心強い橘は、女性を無智の動物と見なしたところがある。否、むしろ彼は女性だけではなく、芸術にも無縁である。小説の中で橘は自分と芸術の無縁さを述べている。

Tは天草生れだと云ふ老船頭を雇って朝晩沖にこぎ出した。船頭の唱ふ追分けが羨ましく思はれたので根気よくその稽古を続けた。船頭は時々呆れた顔をして彼を眺めた。自身も進歩の見えないのを心細く思っていると一週間に老船頭からきっぱりと伝授を断はられた。頑固

で無邪気な老爺であったから T の怒は船頭に向わずに追分けに向った。追分けから凡ての「俗謡」にまで類焼し序にそれのつきものとして三味線を排斥するやうになった²⁵。

T は小説の主人公で、橘のことを指す。小説内の事情はそのまま信じてはいけないのであるが、心情の自叙として、それは知識や理論に得意で、芸術や感受に関して苦手という橘の性格をよく示しているのではないか。当時の橘においては、女性や芸術を軽蔑しているのが、一顧の価値もないものであった。そのため、K さん（お喜久）とともに興安駅までの山道で歩いていた時、T が挑戦的な目的で彼女に山中に住む「蛮族」のことをめぐって大きな理論を振りかざした時、K さんが怒って「ようござんす。私は貴君をそんな方だとは知りませんでした。もうお話をする事は御免を蒙ります²⁶」と言うと、T は面食らったのである。それは確かに、理智や理論が感受性に出会った際、敗北感を抱いたことを T を借りて表現したことになろう。そして、結婚問題について兩人が相談する際にも、K さんに「比較にならない程高い理智を持って居らっしゃる殿方が反って無智な女性にも異性を諒解する事の出来ないのはつまり殿方に「思ひやり」が足りないせいではないでせうか²⁷」と言われ、「この言葉は深く T の心肝に徹したやうであった²⁸」のみならず、病床にふした T は K さんに雑誌か講談本を読んでもらっていた時、「お K さんに相当な学問のある事はこれまでも度々驚かされた程であったが可成り難しい論文をスラスラと読みこなす手際には全く敬服してしまった²⁹」のである。（下線は筆者による）

こうした経験は橘の女性観の革命を引き起こした。つまり、理智はもちろん重要なことであるが、「感情も亦人格を構成する重要材料である」と。女性たちは理智方面で男性に及ばないかもしれないが、感情方面において男性より優越している、ということであった。したがって「病院生活の二ヶ月程の間に T はお K さんに征服されてしまったのである³⁰」という言葉が示したように、橘は差異を認めながら、人格において女性を男性と同等に扱うことで、その生命の感受性あるいは内面性に対する認識も深まっていったと考えられる。こうして、T は「昔のドグマを打破って「女性は男性と同じく人格なり」と云ふ真理を発見した」、「女にも夫々人格があるとすれば当然その個性が存在する³¹」という認識に到達したように、橘は療養経験を通して生命の普遍性と内面性に対する認識を樹立した、と考えられる。

4. 大正女性運動の興起

前節で主に橘の個人経験を手がかりとし、彼の女性観ないし思想全体の推移を論じたのであるが、それは独立した経験ではなく、むしろ大正時代の女性運動の興起と深く関わっている。ここで簡単にその背景をまとめてみたい。

明治時代の日本において、女性の社会的地位は非常に低かった。1898年に発布した『民法』（旧民法とも呼ばれる）には、「戸主及び家族ハ其家ノ氏ヲ称ス」（第746条）、「妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入ル」（第788条）、「夫ハ妻ノ財産ヲ管理ス」（第801条）などの条項が設置され、女性の権利に対して厳しく制限が加えられていた。1900年に公布した『治安警察法』の第五条は、明白に女

子が政事上の結社に参加してはいけないとも規定していた。

政治上だけではなく、また教育においても、良妻賢母主義³²が一貫していた。1895年の『高等学校規程』によれば、「高等女学校ノ学科目ハ修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操トス又随意科目トシテ教育、漢文、手芸ノ一科目若クハ数科目ヲ加フルコトヲ得」る、となっていた。しかし20世紀初頭までには、教育制度が整備されていき、最初的女子大学生と女子博士が誕生したことに示されるように、「良妻賢母」の教育趣旨とはいえ、それはやはり否応なく女性の近代的意識を刺激し、彼女たちを社会の舞台に登場させる役割を果たしたのである。それについて、女性運動研究者石月静恵は次の如く評価している。

多くの女学生にとって学校は、新鮮な刺激と教養を与えてくれる場であった。洋食の調理やミシンを使つての授業、衛生や栄養の話など文化的生活の知識を得たり、体操による基礎体力づくり、学校によっては富士登山に出かけたり……合唱や文学作品を読む楽しさを体得したのである。良妻賢母教育とはいえ、従順な女性の養成というよりは、自己を確立した近代的な女性を誕生させた³³。

経済面においては、明治末から大正にかけて資本主義が発達したため、各種の産業労働者が増大し、俸給生活者（月給制のサラリーマン）が階層として誕生するとともに、都市における専業主婦も現れてきた。主婦を対象として種々の女性雑誌が次々に登場し、女性文化が隆盛することになった。その他、商社の発達にしたがい、事務員、タイピスト、電話交換手などを含む、各種の職業婦人と呼ばれる階層も生じた。また工場で働く女工も増えていった。米田佐代子の統計によれば、「第一次大戦後、かつてない戦争景気とともに資本主義は大発展をとげ、はじめて工業生産高が農業生産高をおいこして、日本は名実ともに世界の工業国となりましたが、これに応じて工場ではたらく婦人の数も、開戦当時一九一四（大正三）年の約五三万五〇〇〇人から、戦後の一九一九（大正八）年には九一万二〇〇〇人にもふえた³⁴」のである。こうして、女性たちは都市中産階級の一部及び工場労働者として、社会の各分野で働いて生きていくようになった。

大衆文化においても、女性社会の一勢力として浮上してきた。1911年に文芸協会主催でイブセンの「人形の家」が東京で上演された。そこに示された近代的女性像は、知識人の男女の間で大きな反響を呼んだ。その主人公ノラを演じた松井須磨子も、新劇女優として注目されていた。また「1913年には、小林一三が宝塚唱歌隊を組織し、翌年初めての公演が行われ、1918年には東京帝国劇場で初公演が行われた。翌1919年には宝塚音楽歌劇学校を設立し、宝塚少女歌劇団が誕生した。観客の増加に応えるため、1921年には花組と月組が組織され、1923年には華やかなレビューをみせることになり、若い女性たちの夢とあこがれの的になった³⁵」。こうして大衆文化における近代的女性像が生まれ、影響力を拡大していったのである。

思想界における女性問題に関する討論もその頃から盛んになった。注目すべきは、それがはじめ

から女性自身によってなされた，ということである。例えば，1914年から1916年にかけて雑誌『青鞥』で行われた貞操論争，墮胎論争，1918年から1919年にかけて，当時の女性運動の各派の代表人物である，与謝野晶子，平塚らいてう，山田わか，山川菊栄らが母性保護をめぐる展開した論争などである。女性運動の努力の結果として，1922年3月18日に衆議院，25日に貴族院が『治安警察法』第五条の修正案を可決し，最終的に女性の集会，結社の参加権を承認したのである。

雑誌『青鞥』創刊号で，与謝野晶子が「山の動く日来る³⁶」と，そして平塚らいてうが「元始，女性は実に太陽であった。真正の人であった³⁷」と宣言したように，大正時代は確かに女性の自覚の時代であったと言える。教育の整備，経済的自立などの原因によって，女性たちはこれまではなかった姿で社会に進出し得た。ジャーナリストとしての橋樑が，当時の女性に関する論説に触れなかったはずがない。橋の終生の女性友人である宿南八重（1891-1978）が彼女の姪の読書について橋に問うと，橋は「小説を読ませるがいいだろう。併しそれは教育の材料だから選擇が必要だ。雑誌は山田わか女史のもの，その他与謝野晶子の著書などもいいだろう³⁸」と答えた，という。与謝野晶子（1878-1942）や山田わか（1879-1957）は，ともに女性評論家として当時名をはせていた，女性運動の代表人物であった。このように，橋樑の女性観における革命は，当時の女性運動の進展と深く関わったものであり，独立した偶然的出来事ではなかったと理解できる。

三、人生観成立の過程：(1)個性，普遍性，体験，思想

「人生観成立の過程」は，橋樑の物事に対する見方の基本を示しているのので，橋研究において無視してはいけない文章である。それは1923年12月14日から『京津日日新聞』で連載し始めたもので，その年の橋の最後の文章であった。当時の橋は旅順に住んでおり，天津『京津日日新聞』家庭欄の主筆を担当し，婦人問題に関する論説を発表していた。1924年1月に国民党第一回全国代表大会が開かれたことをきっかけとして，第一次の国民党と共産党の合作が正式に成立した。そのことは，まさに中国が国民革命期に入ったことを示している。長い期間にわたって中国社会の動向を観察していた橋は当然，この転換期を象徴する大事件を等閑視するわけにはいかず，1924年1月から2月にかけて，「孫文の赤化」という長い論文を『京津日日新聞』に連載していたことになる。その後の橋は中国革命を自分の思想の試練場と見なし，観察者として中国革命に同行することになった。時間的に考えると，やはりこの1923年最後の文章は，橋の自己認識の試みであり，自分の思想の基本的な姿勢の表明でもあった。筆者はこの論文は二つの部分から構成されると考える。二章に分けて，分析してみたい。

まず人生観について橋は，「系統つけられずに自然に成立した，独特な人生観」に賛意を捧げていた。つまり「人間である以上は誰にも其独特な人生観があるに相違ない。独特とは借り物でないと云ふ意味である。借りものであればそれは大抵既成の哲学であらうから原持ち主の作った系統がある。然し独特に且自然に出来上った人生観となるとその儘では一定の系統がない，然し系統のある借りものより無系統な独自のもののほうが自身にとっては比較にならぬほど有難いのである³⁹」と

いうことであった。さらに橘は次のように自分の人生観を三点でまとめている。すなわち「一、一定の形式を持たないこと、二、独自のものであること、三、借りものでないから如何に微細な行動思惟の中にも万遍なく行き亘って働くこと⁴⁰」と。(下線は筆者による)

前述した竹山護夫の観点を借りれば、大正時代は中間的、未完成の時代ということであった。かつての国家次元の旧政治の解体にともない、「個人」が価値の破片化した空間に疎外されることになった。しかし、大正の空間は「国政次元の政治シンボルが国民の底辺に解放されていく過程であり、「政治」の再発見が試みられる舞台でもあった⁴¹」。つまりそれは、未完成の状況に置かれていたと同時に、再度の完成に向っていった時期でもあった。さらに、飯田泰三も日露戦争前後の世代と大正世代の「解体」に対する態度の基本の差異について、次の如く分析している。

日露戦争前後の世代の場合には、その知的「解体」状況に直面して、「自我」の「煩悶」——アイデンティティー喪失ゆえの——からデカダンに陥ったり、またそこから「修養」の苦闘に旅立ったりもしたわけだが、つづく「大正の新青年」世代になると、むしろ「型の解体」は「解放」と受け止められ、「教養と無秩序」の中で、知的享受や美的享楽にいそしむ様相が目立つようになる⁴²。

この姿勢は、日露戦争前後に青春を送った橘において明らかである。国家や政治などに関する旧知識体系の解体の過程を経験した橘は、体系そのものに対する懐疑を抱いた一方、新たな体系を立て直すために、「如何に微細な行動思惟の中にも万遍なく行き亘って働く」ように努力していたのである。その姿勢をまとめると、第一に体系を批判しながらも、自ら体系を持つこと、第二に体系を解体させることをもって、体系の再建を模索すること、という二つの特徴がある。それゆえ、このような独特な姿勢を「反体系的体系」を呼んでもよいであろう。

ところで、ここで問いたいのは、体系を批判、解体させる姿勢は、どのようなものを標準にして働くのか、ということである。なぜなら、一定の標準がなければ、それは無尽の暗夜に陥るに過ぎないから。橘に言わせると、次の如く三つの標準があるということになる。

先づ第一の標準は歴史である。多くの歴史的現象を分析して観るとその中に恒久的な要素と一時的な要素とがある。私は前者を重く後者を軽く取扱ふものである。前者が比較的正しく後者には比較的誤りが多いとするのである。

第二の標準は生物または人類の本然の姿である。これに関する知識は私自身の体験から得たものを主として、これに学問の教へるところを加えて決定するのである。その結果に出来上った標準から正邪を選り分けるのである。

第三の標準は社会組織の進化の過程である。これは理論上第一の標準の一部分に過ぎぬのであるが、意義が重大であるから実際的には独立させて取扱ふのである。資本主義も家族制度

も、男女関係も法律も、道徳もその存在価値を総て進化の一過程として批判するのである⁴³。

三つとはいえ、実際は第一の歴史性、第二の生命の自然状態という二つの標準が設定されている。さらに言うなら、まず進歩史観をもってすべての理論、制度、法律、道徳を相対化した後、生命の自然状態を基準として、それらのものを咀嚼、批判、吸収するということ、これが橘の考え方の基本であったと考えられる。それゆえ、橘は「私は従って現在を肯定する、然しそれを尊敬することは出来ない。私の尊敬するものは未来である、未来が現在になればまたそれを尊敬せず次の未来を尊敬するであろう⁴⁴」と言ったのである。では次に、生命の自然状態とは何か。

橘樸によれば、生命の自然状態は二つのものからなる、一つは「個性」、もう一つは「普遍性」である。その中で、橘が最も重視するのは個性であった。彼が「人々に固有のものは唯個性のみである。個性は自然の即ち運命的のものであって、人格は夫を種として発生し、人生観はそれを鋳型として形成せられる⁴⁵」、「ある人の個性はその人の生命であり永久の価値である⁴⁶」と述べたように、彼にとって個性は、人の主体性を築きあげる本質的な存在であったといえる。

続いて、橘における生命の普遍性は、第一段階の「活きんとする欲求」と第二段階の「ヨリよく活きんとする欲求⁴⁷」ということであった。そのリアリズムと生命主義との両方を含んだ考え方は、もちろん当時のイギリスの功利主義や、ロシアの思想家クロボトキンの「相互扶助論」の影響を受けたものである。さらに「これに関する知識は私自身の体験から得たものを主として、これに学問の教へるところを加えて決定するのである」という言葉が示しているように、橘の生命の普遍性に関する論説は、脳溢血に襲われ、何回も死期を意識したことと、療養期間における女性観の革命がもたらした認識であり、また彼が長年にわたって生物、生存の問題をめぐって展開した実証研究の思想的な帰結でもあったと言える。（下線は筆者による）

個性と普遍性は生命の自然状態を形成する、ということであった。しかし、橘は普遍性より個性の方を強調している、曰く「個性の自由な開展が無ければ独特な人生観も人格もその開展の機会がない。……型にはまった人生観は尊重するに足らぬ。人類の普遍性に立脚した人生観でさへも、他人は知らず私どもは満足しないのである⁴⁸」。つまり橘の思想において、「外来のもの<普遍性<個性」という対比の図式が存在していた。彼にとって望ましい状態は各人の個性が積極的に働きかける状態であった。その言葉を借りると、「各人が個性開展の自由を持ち、その個性に鋳だされた人生観を造り、その個性を種子とした人生観を養って、互に相競争し相協力する社会が最も幸福であり且繁栄する社会である⁴⁹」、ということになった。個性と普遍性は人生観の形成の先天的要素であった。次に、その後天的要素を分析する。（下線は筆者による）

橘樸によれば、個性及び普遍性は人生観の容器であるが、「但し瀬戸物のやうな死物でなく生きて他に働きかける力を有つ⁵⁰」。また人生観の内容を構成する内容は、「思想」である。しかしそれは「読書や通りに一遍の思索から得た薄っぺらな思想ではない。彼の体験によって真に自身のものと成りきったところの思想のみが人生観構成の要素となり得るのである。即ち各人の人生観は先づ

その形式を個性によって規定せられ、第二に体験なる手段によって内容を充たすところの思想の有機的統一を得た一団であると定義することが出来やう⁵¹」とある。ここから見ると、橋が重視するのは外部の理論や思想ではなく、むしろそれらを受ける側の問題であった。「体験」は外部の思想を生命に内部化する役割を果たすため、それは「人生観成立の過程に於て熊手のやうな働きをする、それが思想をとりいれて容器の内容を充たすのである⁵²」と。さらに体験にも、運命的体験と自主的体験という二つの種類があるという。前者は不随意的な現象に会ってから生成したものであるに對し、後者は主体が選出出した経験である。続いて、主体は「練習」を通じて、何回もその経験を繰返した後、それは本能と殆んど違ふところがなく「自分のもの」になり、「或る刺激を受けると無意識に従って自由自在に一定の反応を起す⁵³」ということとなるのである。（下線は筆者による）

生命が体験や練習を通じてその内部に取り入れた思想は、もし旧思想より影響力が強ければ、旧思想を統合するようになることも可能で、逆もあり得る。同時に、個性及び普遍性からなつた人生観の外郭は、死物ではなく、積極的に働きかけるべきものである。もし取り入れられた思想の方が強ければ、この外郭もそれにしたがって変わる。曰く「個性及び普遍性と体験と思想とは互に活発に働き合ふ。たとへば個性または普遍性が体験を指揮してその取入れる思想の種類及び実質に影響を与へることがある。それと正反對に、体験がその取入れた思想を通じて個性及び普遍性に影響を及ぼすこともある⁵⁴」と。まとめると、橋樸によれば、人生観は性情（個性と普遍性）、体験及び思想の相互作用の産物として形成される、ということであつた。

四、人生観成立の過程：(2)人格と反省

前節で、橋樸における人生観の各要素とその働き方に関する分析を行った。ここで注意すべきは、人生観とは何か、人生観の構成要素とは何か、各要素の役割と相互の関係はどうか等々から見ると、それらの分析は基本的に物事の「ある」状態を究明する範囲に留まっていたように見える。言い換えれば、それは人生観そのものを「対象」として「実証的研究」を行うことであり、大正生命思想の傾向から言えば、それは生物、生存に基く冷静でリアリスティックな論説であるように見える。しかし文章「人生観成立の過程」の第9に入ると、橋は突然に人格と価値のことを語り始め、そこで「反省」の概念を取り上げることになる。曰く、

一個の文化人の人格は他人の批判によつてのみ形成されるかと云ふに決してそんな事はない。自己が自己を客観し得ることは十分に可能である、單に可能であるばかりでなく最も深く且正確に自己を知り得るものは自己に外ならぬ。人間の凡ゆる行為のうちで自己を反省するといふ事位正確に従つて有効な行為は無いのである。……自己を反省することを知らないものはをしなべて馬鹿である。……何となれば、彼等には人間としての価値が乏しいからである。……自己反省はその人生観及び人格を築きあげる為めの第一の鍵である⁵⁵。（下線は筆者による）

ここからの部分は、明かにその前の文章と違い、冷静な研究というより、呼びかけに近いものである。人格、反省、正確、価値などの言葉を見れば、この部分はすでに「ある」に関する研究から離れ、「べき」に対する構想、即ち大正生命思想における人生、人格に向う部分に入り込んだもの、ということがわかる。橘の文章もそのため、前後に二分されている印象がある。

上記引用した文章の前の部分においても、橘は「人格」と「人生観」の関係を「重箱と牡丹餅の関係でなくして鐘と撞木との関係である」と喩え、即ちそれらは「内的関係ではなくして外的関係である⁵⁶」と述べていた。人格は「客観的概念」であり、三要素（性情、体験、思想）の「価値」であるに対し、人生観は「その生活態度」である⁵⁷。「客観的」という形容詞は、人格の価値の普遍性を表明している。その一方、人生観は独自の、主観的なものに近い。橘の人格に関する語り方は、明かに当時に流行っていた人格主義、理想主義の影響、特に代表人物たる阿部次郎⁵⁸と土田杏村⁵⁹の影響を受けたものと見受けられる。「八重日記」（1921年12月14日）には、橘が二人の著作に触れた状況が書かれている。すなわち「橘さんが持って来て下さった『改造』十二月号の土田杏村「文化主義原論」と阿部次郎「理想主義の爲に」を併せて読み、興味深し⁶⁰」とある。以下では、二人が橘に影響を与えたと考えられる部分を取り出して分析する。

(1) 二人ともまず人格を最高の価値としている。

阿部：人格主義とは何であるか。それは少くとも人間の生活に関する限り、人格の成長と発展とを以て至上の価値となし、この第一義の価値との聯関に於いて、他のあらゆる価値の意義と等級とを定めて行こうとするものである⁶¹。

土田：其れ自身に存在し、しかも其れ自身に決定するものは人格である。人格は決して自然物に征服せられるものではない。而して同時に人格ほど尊厳なるものは宇宙に無い。即ち人格は此の宇宙の本体であると言う可きである⁶²。

(2) 二人ともカントの思想の影響を受け、理想の成立には普遍性が不可欠であると主張した。

阿部：理想は、これを懐抱する人に与えられる世界の全体に妥当することなしにその人の全生活を支配することが出来ない。この意味に於いて、それは、個人の素質と生活とを越えて、万人に普遍的に妥当するところにその権利を築かなければならぬ⁶³。

土田：（快樂そのものが人生の理想になれるかどうかについて、筆者注）此の如き利那の純粹個人的なものは人生を規定する価値原理とはなり得ないのである⁶⁴……自然物は其のまま目的では無い……⁶⁵我々の生活の意義は自然生活の快樂にあるのでは無く、人格の自由なる表現、個々経験に於ける生命の味識にある⁶⁶……

(3) 橘の「人生観」また「人格観」に多くの影響を与えたのは、やはり阿部次郎の思想だと考えられる。ここで両者（阿部次郎と橘）の共通点と相違点を以下に分析してみる。

まず、阿部次郎は次のように、外部理論の内面化を主張している。

自ら欺くことなしに一つの主義を信ずると言明することは決して容易なことではない。一つ

の主義を信ずるとは、これによって生活の全体を律する義務を負うことを意味するからである。あらゆる思想とあらゆる実行とを、この原理を以て貫かむとする情熱を持ち続けることを意味しなければならないからである。この操持と情熱とを缺くとき、吾々の主義はただ名称であって生活の原理ではない。生活原理としての主義は、吾々の心の奥底に深い根を植えているものであることを要する⁶⁷。(下線は筆者による)

一つの主義を信ずるとは、それを生活の規準として、自律しなければならないということである。これは橘のいった「体験」のこととよく似ているが、方向は逆であったと言える。つまり阿部は理想主義の情熱を以て、自分の生活にある主義に接近させようとしたと言える。その姿勢に対し、橘は「主義」そのものを歴史的に相対化し、むしろ個性に適合するものを生命が自主的にそれを取り入れ、自分のものにする、ということを主張したのである。もし阿部が内から外へという姿勢をとったならば、橘の方が外から内への姿勢をとったと考えられる。にもかかわらず、方向は逆だが、目的は同じく内面的世界と外部の世界の合一化を図ることにあったといえる。

次に、阿部次郎は反省そのものを強調している。曰く、

吾々が人生の行路に於いて無数に与えられる岐路に踏み迷うとき、そうして本能も衝動もその決定を吾々に与えるほどの力を持っていないとき、人はこれの解決を生活全体の方向に求めなければならない。抑々自分の行く可き道は何処にあるか、自分の生活を全体として導きつつあるものは如何なる力であるか。此等の反省は吾々の眼を当然に生活全体の基礎に向わしめるであろう。そうして、人生に於いては、基礎に向うとは目標に向うことである。茲に於いて吾々は又理想を明かにせむとする欲求に駆られる⁶⁸。

ここからみると、自己反省ができなければ、人間としての価値が乏しいと考えていた橘樸は、このフレーズに深く感心したはずであろう。(下線は筆者による)

第三に、物事を考察する標準について、阿部次郎は「個性」、「歴史」及び「現実の組織」という三点を取り上げた。曰く「個性を顧慮すること、歴史を顧慮すること、凡そ対象となる現実の組織を顧みて抽象的普遍と劃一とを排すること——此等のことは皆目的適合性（合目的性）の問題として、理想主義が無視することを許されぬ重要な一視点である⁶⁹」と。それに対して橘は、「歴史」、「生物または人類の本然の姿」及び「社会組織の進化の過程」という三つの標準をとった。橘は個性と普遍性を生命の「本然の姿」に組み入れた上で、歴史と社会組織にも着目し、それらを結び付けたのではないかと考えられる。(下線は筆者による)

最後に、阿部次郎は体験そのものを重視し、それを「吾々の生活の発展の最初の地盤」、「吾々の思索の第一の出発点」と見なしている⁷⁰。橘樸も体験を重視し、それを思想の熊手であったと考えた。しかしそれはあくまでも後天的要素に過ぎない。橘にとって最も本質的なものは、「個性」で

ある。他方で、阿部次郎における人間の本質たるものは人格である。彼は人格を次のように四つの次元で捉えている。

第一に人格は物と区別せられるところにその意味を持っているものである。

第二に人格は個々の意識的経験の総和ではなくて、その底流をなしてこれを支持しこれを統一するところの自我である。

第三に人格は分つべからざるものと云う意味に於いての *Individuum* (個体) である。一つの不可分な生命である。

第四に人格は先験的要素を内容としている意味に於いて後天的性格と区別される。カントの言葉を用いればそれは単純な経験的性格ではなくて叡智的性格を含んでいるところにその特質を持っているのである⁷¹。(下線は筆者による)

まとめると、阿部のこの説明は人格について、物と違う人格、人格の本質性、統一性及び先験性という四つの特徴を語っている。こうして見ると、人格というものが阿部次郎において、最も本質的な存在であったことがわかる。一方橋の場合では、個性が「自然の即ち運命的」なものであり、人格にとってそれは種、人生観にとってそれは鋳型であった。つまり橋において個性が人格より根本的であった。人格は価値の概念であるに対し、個性は自然の概念である。個性と人格の区別は、橋樸と阿部次郎の考え方の最大の違いであり、大正生命思想の二つの傾向性——「生物、生存」と「人生、人格」——の違いを示していたと考えられる。

(4) 阿部次郎、土田杏村の二人とも、唯物論に対する批判を通じて、階級闘争を否定しようとした。

阿部次郎によると、労働運動は人格生活向上の条件として所有の増加を求める運動でなければならない。もし労働者がその創造欲を喪失したなら、「彼はただ、飢えた資本主義者、嫉妬と猜疑とに満ちた資本主義者、新たに資本主義の軍門に降れる労働道德の謀反人に過ぎない⁷²」のであった。

土田杏村は、労働は人格的、自律的、自己目的的な行為であると主張していた。彼によれば、労働運動も人格運動の一種であり、「労働は人格を離れて其の意義を持たない⁷³」。しかし階級闘争は人格のことを離れ、全く利害心に基く活動になってしまった。それゆえ土田は「プロレタリアの利害の為にブルジョアの利害の専制を攻撃するものは、人生観上の理想に於て資本主義者と何の区別するところがあるか⁷⁴」と厳しく非難したのである。

ここで見たように、二人とも「下部構造—上部構造」を基本とする唯物史観を批判し、人格の自律性を強調し、階級闘争を否定した。ここにおいて、彼らと橋の考え方の根本的な違いが見出せる。橋が「階級闘争は私の全支那観の骨子を成すものである⁷⁵」と言ったように、階級闘争は橋の中国の歴史や社会を研究するに最も重要な手がかりであった。

しかし見逃してはいけないのは、橋は当時の日本のマルクス主義者のように唯物史観を教条主義

的に捉え、経済の基盤だけに目を向けていたのではなく、心理、習慣、風俗、信仰などの要素も考慮に入れて、社会の全面的考察を行ったことである。例えば、橋は「支那革命史論稿（一）」（1924）において、中国革命の過程で中産階級が官僚階級を打倒して自ら支配階級になると予測した⁷⁶。そこで橋は官僚を階級と見做したが、それは「社会階級」であり、そして富の蓄積だけでなく、中国伝統の「宗法的家族制度」が官僚たちを一つの社会階級として成り立たせた最大の原因である⁷⁷、ということである。さらに「社会階級」とは何かというと、橋によれば、

それは先ず第一に部分社会である、即ち国家又は民族と云ふ全体社会を構成する一要素であると同時にそれ自身が一つの社会を構成するものである。第二に他の凡ゆる部分社会が縦の存在であり其の横の拡がり全体社会の全面に互ることの絶対にないに反し、社会階級だけは必ず横の存在であって其の拡がり全体社会の全面に及んで居る⁷⁸。

続いて橋は社会階級としての官僚が四つの障害を設け、外部者をその門外に押しとどめた、と述べている。障害とは、科举制度、「煩瑣なる階級的シンボル」、「面子」意識及び「学問」の独占であった⁷⁹。このような階級の捉え方は、明かに当時の一般的マルクス主義者と違い、「上部構造」の要素に対しても橋が十分な考察を行っていたことの証明となる。橋の中国社会観、革命観は今後の研究に譲ることにしたいが、ここで主張しておきたいのは、橋樸の認識の基盤は専ら下部構造や「ある」に関する研究に置かれていたにもかかわらず、上部構造の要素あるいは「べき」に関する構想を無視したものではなかった、ということである。彼はむしろ、大正生命思想のこの二つの傾向を彼なりに結びつけ、自分の独特な思考法を形成したのではないかと結論づけられるのである。

おわりに

明治から大正にかけての時代思潮の特徴は次の三点でまとめられる。第一に、国家・民族・政治に関する主題の衰弱と個人・社会・生命に関する思潮が浮上したこと、第二に、大正生命思想が、生物・生存の視角から出発した「ある」に関する研究と、人生・人格の視角から出発した「べき」に関する構想という、二つの基本的傾向に分化するように見えること。第三に、旧体系が解体したが、新しい体系や秩序が結局成立しなかったことである。

本論は以上の時代背景を参照しながら、橋樸の青少年期の思想動向、1918年の療養経験及び1923年の文章「人生観成立の過程」を手がかりとして、橋思想の形成及びその性格を解明しようとした。橋は時代の子である。彼は大正生命思想の二つの対立した傾向に対して自分なりの結合を試み、「反体系的体系」という独特な思考法をもって、未完成の時代において新たな完成に向けて努力していた、と考えられる。筆者はその結合の仕方を「反啓蒙の啓蒙」と名づけたが、それに関してはここでは繰返せない。拙稿「橋樸の生命主義とその展開について―「東洋改造論」に到る道」（明治大学大学院教養デザイン研究科編『教養デザイン研究論集』第14号、2018年9月7日

出版)を参考されたい。

注

- ¹ 船山信一『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』,こぶし書房,1999年6月25日。p.16
- ² 同前, pp.48-49。
- ³ 飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』,法政大学出版局,2017年4月25日。
- ⁴ 同前, pp.10-11。
- ⁵ 同前, p.88。
- ⁶ 同前, p.89。
- ⁷ 竹山護夫「大正期の政治思想」,『大正期の政治思想と大杉栄』名著刊行会,2006年1月23日。p.3。
- ⁸ 同前, pp.3-4。
- ⁹ 同前, p.4。
- ¹⁰ 1912年12月,陸軍がその2個師団増設の要求が満足されなかったことをきっかけに,後任陸相を出さなかったため,第二次西園寺公望内閣が総辞職に追い込まれた後,内大臣桂太郎は天皇に詔勅を出させて組閣に着手し,軍備拡張を入閣の条件とした海軍大臣斎藤実を詔勅によって留任させ,組閣を完了した。こうした軍部の横暴と藩閥政治に,ジャーナリスト,交詢社系の実業家たちが憲政擁護会を組織,「閥族打破,憲政擁護」をめざす民衆運動を引き起こした。立憲政党的中心として,尾崎行雄と犬養毅はこの運動において活躍していた。1913(大正二)年2月9日憲政擁護第3大会が開かれ,翌10日に数万の民衆の包囲なかで,桂内閣は内閣総辞職を表明した。民衆の政治的成長のもとで,長州閥と政友会の提携した桂内閣の終焉は,「大正政変」と呼ばれる,大正デモクラシーを切り開く意味を持った大事件である。
- ¹¹ 1914年に起こった日本海軍の収賄事件。日露戦争後策定された日本帝国国防方針に沿って,日本海軍は新たな大拡張を開始,巨額の負担を財政にかけたにもかかわらず,ドイツの軍需会社ジーメンスからの軍需品購入に際し,海軍当局は発注品代金の3.5%ないし15%をコミッションとして受け取っていた。この秘密は,ジーメンス会社の元東京支店員のベルリンでの裁判中に発覚し,世論の大きな反発を引き起こした。第三次桂内閣を継いだ海軍大将山本権兵衛内閣は,その事件のため,総辞職へ追い込まれた。
- ¹² 同前, p.5。
- ¹³ 同前, p.5。
- ¹⁴ 橘樸『手(四)』,『新天地』第八年,十月号。1928年10月。p.77。
- ¹⁵ 同前。
- ¹⁶ 国民教育研究所編『近代日本教育小史』,草土文化,1978年4月28日 第11刷。p.80。
- ¹⁷ 同前,「資料⑥」p.97。
- ¹⁸ 前掲,橘樸『手(四)』,p.77。
- ¹⁹ 同前, p.73。
- ²⁰ 同前, p.81。
- ²¹ 徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』,民友社,1916年11月。p.17。
- ²² 前掲,橘樸『手(四)』,p.80。
- ²³ 同前。
- ²⁴ 橘樸自伝『手(一)』,『新天地』第八年,七月号。1928年7月。pp.87-88。
- ²⁵ 彌次郎「見ざるの記」(一),山田辰雄・家近亮子・浜口裕子『橘樸 翻刻と研究—『京津日日新聞』—』,慶応義塾大学出版会,2005年11月1日。pp.543-544。彌次郎と彌次は橘樸のペンネーム——筆者。
- ²⁶ 彌次「垣間見の記」(三),同前, p.549。
- ²⁷ 彌次「垣間見の記」(八),同前, p.563。
- ²⁸ 同前。
- ²⁹ 彌次「垣間見の記」(五),同前, p.554。

- ³⁰ 彌次「垣間見の記」(八), 同前, p.564。
- ³¹ 彌次「垣間見の記」(十一), 同前, p.569。
- ³² 1885年文部大臣の森有礼は,「女子教育の主眼は,良妻賢母となり,一家を整理し,子弟を教育できる力をつけることだ」と訓示した。
- ³³ 石月静恵『近代日本女性史講義』,世界思想社,2007年4月30日。p.32。
- ³⁴ 米田佐代子『近代日本女性史 下』,新日本出版社,1972年。p.139。
- ³⁵ 前掲,石月静恵『近代日本女性史講義』,p.88。
- ³⁶ 与謝野晶子「そぞろごと」(1911年9月),堀場清子編『『青鞥』女性解放論集』,岩波書店,1991年4月16日。p.12。
- ³⁷ 平塚らいてう「元始女性は太陽であった—『青鞥』発刊に際して—」(1911年9月),同前, p.14。
- ³⁸ 宿南八重『八重日記』,山本秀夫編『甦る橘樸』,龍溪書舎,1981年8月15日。p.275。
- ³⁹ 朴庵「人生観成立の過程」,前掲『甦る橘樸』。p.224。朴庵は橘樸のペンネーム——筆者。
- ⁴⁰ 同前, p.225。
- ⁴¹ 前掲,竹山護夫『大正期の政治思想と大杉栄』。p.7。
- ⁴² 前掲,飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と社会の発見とそのゆくえ』。p.130。
- ⁴³ 前掲,朴庵「人生観成立の過程」。p.225。
- ⁴⁴ 同前, pp.225-226。
- ⁴⁵ 同前, p.226。
- ⁴⁶ 同前, p.227。
- ⁴⁷ 同前, p.231。
- ⁴⁸ 同前, p.228。
- ⁴⁹ 同前。
- ⁵⁰ 同前, p.237。
- ⁵¹ 同前, p.228。
- ⁵² 同前, p.238。
- ⁵³ 同前, p.229。
- ⁵⁴ 同前, p.238。
- ⁵⁵ 同前, p.240。
- ⁵⁶ 同前, p.226。
- ⁵⁷ 同前, pp.239-240。
- ⁵⁸ 阿部次郎(あべ じろう, 1883-1959)は,東大哲学科卒業で,新カント派のT.リップスの影響を強く受けた。彼が1914年に書いた『三太郎の日記』は,内面的生活を吐露した創作で,当時の哲学青年の愛読書になり,大正昭和の青春のバイブルとして大きな反響を呼んでいた。1917年に昔の同級生岩波茂雄が「思潮」(現在の「思想」)雑誌を創刊した時,阿部次郎はその主幹となった。主著には『倫理学の根本問題』(1916),『美学』(1917),『人格主義』(1922)などがある。
- ⁵⁹ 土田杏村(つちだ きょうそん, 1891-1934)は京都帝国大学で西田幾多郎に師事,大学院在学中に雑誌『文化』を創刊し,社会主義と理想主義の結合を目ざし,社会,教育,文学,芸術など多方面にわたる評論活動を展開し,文化主義を主張していた。マルクス主義批判の立場をとり,河上肇と論争した。昭和になると,国家主義に傾いた。主著には『文化主義原論』(1921)などがある。
- ⁶⁰ 前掲,「八重日記」, p.276。
- ⁶¹ 阿部次郎『人格主義』,岩波書店,1922年6月。p.56。
- ⁶² 土田杏村『文化主義原論』,内外出版株式会社,1921年5月。p.54。
- ⁶³ 前掲,阿部次郎『人格主義』, p.37。
- ⁶⁴ 前掲,土田杏村『文化主義原論』, p.68。
- ⁶⁵ 同前, p.69。
- ⁶⁶ 同前, p.71。

- ⁶⁷ 前掲，阿部次郎『人格主義』，p.3。
- ⁶⁸ 同前，p.29。
- ⁶⁹ 同前，p.42。
- ⁷⁰ 同前，p.404。
- ⁷¹ 同前，p.57。
- ⁷² 同前，p.351。
- ⁷³ 前掲，土田杏村『文化主義原論』，p.101。
- ⁷⁴ 同前，pp.150-151。
- ⁷⁵ 橘樸「支那はどうか―内藤虎次郎氏の新支那論を読む―」，『月刊支那研究』第一卷第三号，1925年2月。
p.444。
- ⁷⁶ 橘樸「支那革命史論稿（一）「乱世」に関する社会史的考察」，『月刊支那研究』第一卷第一号，1924年12月。
p.69。
- ⁷⁷ 同前，p.59。
- ⁷⁸ 橘樸「支那官僚の特殊性」，『支那研究』第一卷第5号，1925年4月。『支那社会研究』，日本評論社，1936
年6月16日。p.442。
- ⁷⁹ 同前，pp.443-445。